

出張の飛行機で暇なとき、日本破産後の日本を外から見た短編を書いてみようと思い、書き始めた短編小説だったのですが、書いているうちに主人公の有華が暴走して、ラブコメディになってしまいました・・・。

感想・ご意見でもいただければ幸いです。

登場する人物、団体名は架空の物で、現存する団体とはまったく関係ありません。(笑)

Welcome to my life.

著者 バンコク かじ

2016年の7月、私は故郷の日本に帰ってきました。

この5年は日本という国が、破産宣言して世界の経済に大きな影響を与えた後、日本と言う国が再建に取り組んだ年月でした。

日本の国が破産したにも関わらず、5年と言う短期間で経済が立ち直ったのは東洋の奇跡と言われています。

しかし、実際は大企業、銀行・郵貯銀行や保険会社はこの破産時に、外資のM&Aによりほとんど買い占められてしまっています。

当時の国民の預貯金は、預金封鎖は行われなかったものの、国債の償還を3年デフォルト金利ゼロ宣言、100%を超えるインフレが起き、最初の3年で円の価値が1/1000になってしまい、多くの年金生活者は生活に困窮した。

政府は、このタイミングで日本の企業の株などを担保にIMFから100億ドルを借り入れ、国債の償還を行い無借金まで持ってきた。

その後の5年は弱者切捨て、地方切捨てを行い多数の餓死者を出しながら、大都市圏だけの国作りを進め、メガ東京を初め、8つのメガ都市による国家に統一され5年と言う短い期間で国家再建が実現しました。

この5年で人口は6200万人まで減少、うち外国からの移民が1/5を占めるにあたり、いかに大きな変化があったのかが判ります。

日本円だけで預金していた老人や普通の年金生活者、無職の人たちのほとんどが、どん底の生活を強いられ、多くの犠牲者が出ました。

暴動も各地で起きましたが、米国指揮下の自衛隊と米軍に鎮圧され、3ヶ月ほどで、だれもが諦めてしまった。

今のこの国の定年は50歳で、50歳になるとほとんどの人が大幅に収入を減らし、社会保障からも見放されます。

若者は就職後、がむしゃらに働いてお金を貯めて、50歳までにインドの田舎かアフリカの国へ移住でもしないと安定した老後の暮らしは出来ません。

まだ、企業に勤めて預金や投資資金が作れる人でもこのレベルですから、最初から派遣やアルバイトでは、老後の生活はとて大変になることが予測されます。

お金を貯めて移住できない、定年退職者は移民と同じ単純労働か農業で日当を稼ぎ食べていく必要があり、健康なうちは良いですが病気になったら、医者にかかる費用は現金なのでお金が無いと、のたれ死にを覚悟しないとイケない、大変な世の中です。

このおかげで、60歳以上の人口比率は非常に少なく、年金や老人医療と言った社会コストは非常に少ない国なので、公務員も薄給、人数も最低限になっています。

国家予算は現在黒字になっていますが、黒字分は IMFの返済に当てられます。

企業はすべて外資系ですから、利益のほとんどが海外へ持ち出され、大卒の給料は年収 120万新円です。

生活するのがやっとというレベルではありませんが、優雅な生活とは言えないようです。

この国は、子供が生まれ戸籍を登録すると、政府から登録された ICチップが支給されます。

もし、日本国民として登録されるのがいやであれば、拒否して移民登録も出来ますが、こうなるとパスポートも発行されませんので、どこにも行けないことになり、普通は日本人登録をします。

しかし、登録をすると 50歳になるまで、世界のどこに居ても日本に税金を払う義務が生じます。

7歳になるまでは、このチップを親が管理します。

親は、端末に2個のチップを入れて使います。

7歳になると、政府から携帯端末を支給され、このチップを個人の端末にセット、指の静脈登録を行う、携帯端末を利用してこの国のシステムにアクセスできるようになり、お金の預金、支払い、交通機関の移動等がすべてできるようになります。

この国では今、お金の実態はありません、すべて電子マネーで運用されています。

良い点はお金の印刷コストはない、持ち歩きも不要最大のメリットは全てのお金の動きが全て管理できることです。

犯罪によるお金の受け渡しも、すべて記録が残るので本人を脅して使わない限り難しくなっています。

移民も登録 ICを挿入した携帯端末を買わないと生活出来ません、お金の支払い、交通、各建物やビルに入るのも、この携帯端末を持っていないと入れませんので。

本人はチェックされていることはわかりませんが、携帯端末を持たずにビルなどのチェックゲートを通り過ぎようとする、警報が鳴り、警備員と警察が飛んで来て、まず逮捕されます。

ゲートは建物だけでなく、道路にも多く設置されているので、当局は裁判所の開示許可を貰えば、どこの誰が、何時にどこへどうやって行って、何を買ったとかまで全て判ります。

このシステムが出来てから、犯罪は大幅に減りました。

最初は、移民を受け入れるための管理ツールだったのですが、国家再建の為に、全国民が持つことに法改正され、7歳以上の全国民が持っています。

プライバシーの漏洩が問題で、大反対が起こり、廃案になりかけましたが、情報の開示には、裁判所の許可が必要となり、最終的には法案が通りました。

一部、国の管理局で、ある役職以上は閲覧できるらしい。

通常の生活では、非常に便利なツールです。

子供のころからの記録はすべて、この携帯端末を通して中央のサーバーに蓄積されます。

学校の成績、クラスメート、買った物や貰ったお小遣いまで記録され、その気になれば投資も出来ます。

銀行などは、個人で選ぶことは出来ませんが、すべてのお金の動きは把握されていますので、脱税も無くなりました。

これを、管理ユートピア国家として、世界にアピールしています。

前置きが長くなりましたが、私は日本破産の前の年に親に連れられて、海外へ移り住んだ人間です。

日本政府の法改正で、海外居住者も登録しないとパスポートの更新が出来なくなったので、日本に一時帰国することになりました。

親は50歳を超えているので登録しなくてもOK、だから私だけの帰国となりました。

まずはお金の問題、登録するには、全ての財産を登録しなければなりません。

私は、日本の銀行にはお金を預けていません、今の法律では、個人で海外へのお金の持ちしは100万新円・・・海外から見たら、1000US\$の価値しかない。

海外からの持ち込みは、個人の場合、50%の税金が掛かります、国民をなめている、日本で暮らす気は起こりません。

私の海外口座は、親の助言で3つに分けてあり、生活用、投資用、預金用で生活用以外はジョイント口座です。

申請は、生活用口座だけ。

日本の登録局へ出かける前に、空港で香港ドルから新日本円へと思ったのですが、端末が無いので、税関で海外観光客用のテンポラリー端末を購入・・・買わせるのかと怒！

1000US\$も払わされた、生体登録（静脈）もあるので高いとか。

日本人でなかったら、100US\$だって、またまた日本国民をなめている。

空港の銀行で、香港ドルから新円にして端末にデポジット。

20万香港ドルを持ち込み、日本人だから半分税金で取られ、10万香港ドルを1,500万新円にしました。

税関にある銀行員は「お嬢ちゃん、こんな大金どうしたのって」・・・変な目で見

し。

今の日本の若い女性はけっこう外国へ稼ぎに行っている、変な目で見ろな、セクハラで訴えるぞ！

まあ、現在の日本では大卒給料の10年分以上なので、変な目で見られるのは仕方がないか。

一歩外へ出ると、タクシーの制服を着た青年が、「どこまで行くの」「乗らないか」と声を掛けてくる、なれなれしいので、無視しているとリムジンタクシー・ワークパーミットを見せて、正規のリムジンタクシーだと言っている。

まあ、携帯端末のおかげで、犯罪はなくなっているので問題ないとは思いますが、品がなくなったなこの国。

とりあえず、このタクシーに乗ることにした。

タクシーの運転手は4各国語しゃべると自慢している、今の日本人はほとんどタクシーは乗らない、メガ東京は電車が整備されているし、タクシーは非常に割高で、外国人観光客が金持ちしか利用しないので、高級な職業らしい。

初乗り、1万新円・・・年収100万新円では乗れないか。

リムジンタクシーはGM TOYOTAのレクサス HX いい車だけどアメ車になるのね。

成田からメガ東京都心まで2時間、高速はメンテがあまり良くないようで、わだちがひどい。

「車は減ったので、道路事業団はお金が回ってこない、走れば良いと言ってメンテナンスはほとんどしていないよ」

運転手のしゃべる声を聞いていると、けっこう若い。

最初は税関や銀行でぼられて腹立てていたのに、気にしていなかったが。

「あなたいくつ？」

「俺、24歳」

「へーえ、若いのね」

「大学の外語学科卒業して、けっこう苦労してこの会社に入った」

「今の日本って、就職大変なの？」

「そりゃー大変さ、大学出ても、技能がないと正規社員になれない」

「正規社員になれなかったら、50歳で野垂れ死にさ」

「ところで、お嬢さんはどこの人？日本語、話しているのに、日本人だと思うけど、日本人でVIP出口から出てくる人はほとんど居ないよ」

「持ち物だってブランド品だし、時計はブレゲ、あんた金持ちだろ？」

「俺たちは、外国から来た金持ちに優先して声かけるので、持ち物チェックいれるのさ」

「私は、タイのバンコクに住んでいるわ、日本人よ、今回ビジネスクラスで来たので、

VIP出口だったようね」

「子供のころに来た時は、VIP出口なんて無かったのに」

「今の日本は金持ちに優しいのさ！」

彼の話し方が急に険しくなった。

「ちょっと、急に声荒立てないでよ、びっくりするじゃない」

「日本人で金持ちって言うのは、過去の支配階級で混乱時にうまくやった官僚が多い」

「あんたも、その仲間なのだろ」

彼は、急に機嫌が悪くなって、運転まで荒っぽい・

「ちょっと、まじめに運転しなさいよ！事故したら大変だわ」

急に無口になったので、ほっておこうと思ったのだけど、このままではなとなくしゃくなので、こちらから質問することにした。

「今の日本って暮らしやすい？」

「・・・」

「彼女居るの？」

「・・・」

「今、どこ？」

「・・・」

「ちょっとぐらい話なさいよ！」

「せっかく日本に来たのだから、後で観光案内してもらおうと思っているのに」

「え！リムジンタクシーで観光なんて高いぜ」

商売の話になったら、のってきた。

「少々高くても交通機関判らないし、貸し切りでいいわよ」

「それなら、話は別だ、不機嫌ではお客に嫌われる」

急に愛想良くなるのも、変な気がするが、まあ、楽しい方がよいし。

「で何日まで？」

「そうね、今からだと役所も閉まっているし、明日とあさって、3日目は空港まで」

彼は路肩に車を止めると、携帯端末で本社に電話をして確認を取っているようだ。

「1日 8万新円、3日分、24万新円+消費税20%」

「税込みで、28万 8千新円・・・おれの2か月分の給料と変わらない」

「先払いだけどいいか？」

「いいわよ、どうやればいいのか」

「簡単さ、俺が出す端末に請求金額が表示されているから、きみの端末を10cm以内に近づけて、支払いボタンを押せばOKさ」

「なにか、急になれなれしいわね、判ったわ」

彼の出した端末の表示金額を確認してから、私の端末を近づけて、支払いボタンを押

すと「シャリーン」と音がして、私の端末に支払った金額と残高が表示された。

彼が、残高見ようとしたのでさっと引っ込めたが見られた？

「ちょっと、マナー違反よ！けど、これって、危なくない、落としたら全財産持ってかれる」

「いや、大丈夫さ、本人がボタン押さないと認識されない、手の静脈パターンを認識しないと動かないよ」

「そういえば、メガ東京都心って言ったけど、詳しくは聞いて無い、どこへ行けばいい」

「乗ったときは機嫌が悪かったので、ぶっきらぼうでごめん」

「品川のプリンセスホテルまで行って」

「判った、しかし、きみは日本のお金持ちみたいな感じ、しないな」

「それってどう言う意味？」

「だって、日本で乗せる金持ちって、お前なんかと話せるかって言うような態度だから」

「日本は変な国になってしまったのね、威張る必要なんて無いと思うけど」

それから、日本の状況とか治安、色々、確認しているうちに目的地に到着、メガ東京はきれいなビルが立ち並び、とても整備されているように見える。

「ホテルに着いたよ、明日は何時に迎えに来ればいい」

「そうね、役所は 9時だから 8時半に来て」

「判った、時間道どおりに来るよ、これでもプロだから」

車を降りると、ホテルマンが私の TUMI のスーツケース持って、チェックインカウンターの前で待っている。

チェックインカウンターで「三嶋 有華で予約入っているはずだけど」と言いながら担当の女性にネットステートメントを電子ペーパーで見せる。

電子ペーパーは、ネットで予約した時に、送られてきた情報をパソコンで一度表示させることで、入力を切っても、表示は保持される。

「お客様、端末には予約情報入っていますか？」

「いえ、私の端末は観光端末なので、入っていないはず」

「外国の方ですか、それならパスポートを」

私は日本のパスポートを出して、見せると少しげんな顔をされましたが、電子ペーパーステートメントとパスポート番号で認証完了。

「観光端末ですと料金は先払いです」

「3泊で、21万新円になります」

「さすがに安いわね」と言ったら、露骨にいやな顔された。

香港ドルのような外貨で日本破産前の円計算すると、旧円換算で2万1千円程度の価値になるからなのだけど、今の日本人にとっては高いわよね。

タクシーと同じように、差し出された端末に私の端末を近づけて、支払いボタンを押し「シャリーン」と音がして、支払い終わり。

「三嶋さま、25階のエグゼクティブルームです」

と言ってなにも渡してはくれない。

「部屋のキーは？」

「お客様の端末を携帯してドアノブに触れれば開きます」

こんなことも知らないのかと、少し怪訝な顔された。

「朝食は各ビュッフェで、端末をお示してください」

私の携帯端末の情報がホテルのサーバーに入力されたのだろう。

「お荷物は、案内の者が運びますのでそちらへ」

「ありがとう」

私は、案内の人について部屋まで、部屋で荷物を置いて、案内の人が説明を始めたが、制止して「いいわ、判るから」と言うと、彼は当然のように自分の端末を差し出した。

「あ、チップね」

表示されている金額を見ると、3000新円、お客の部屋のレベルや持ち物で判断した金額なのだろうけど、ちょっと高くない。

私の金銭感覚だと、20HK\$か・・・まあいいや。

私の端末を出してチップを支払い、うれしそうな顔して「ごゆっくり」と言って出て行った。

やっと落ち着いた、8年ぶりの日本、タイに行ったときは14歳だった、親がしばらく日本に帰らないからと言って、強引に海外へ連れ出されてから日本のことはニュースで知っていた。

メガ東京へ来て見ると、そんなにひどいことになっていない気がする。

成田からメガ東京までの道では、さびれた町はたしかにあったけど。

シャワーを浴びて、着替え、さて夕食に出かけるかな、どこで食べたら良いかタクシーの青年に聞いておけばよかった。

まずは、ホテルのレセプションで聞いてみよう。

そう言えば、彼の名前聞いてなかった、明日会えるから聞かなくては。

ホテルのレセプションで、レストランの内容を聞いていたら、携帯端末の呼び出し音・・・だれだ、日本で私に電話する人は居ないはず。

端末のディスプレイ表示を見ると、今日乗ったタクシー会社からだ、電話番号教えていないはず。

電話を取って「なんですか」って言ってみた。

そうしたら、昼間の運転手の声で、「車にお客さまの忘れ物がありましたので、特別許可を貰って電話しました」

「よければ持って行きますので、ご了承ください」

忘れ物したはずはないのだが？まあ、なんとなく彼に会えるのなら、面白いかと思い「そうですか、ホテルに来てくださるのですか」

「10分で参りますので、お待ちください」

なにか、話し方が全然違う。

「ロビーで待っておりますので」

そう言って、電話を切って、レセプションの人にはお礼を言って、ロビーのソファーに腰掛けた。

待つこと10分、彼がタクシーの制服でなく普段着でやってきた、なぜ普段着。

まあ、高そうではないが小綺麗な格好。

「やあ」

「ちょっと、目的は何？」

「それに、さっきの電話の話し方、昼間と全然違うじゃないの」

「特別扱いで、きみの携帯端末にアクセスするには会社のサーバーを通さないと出来ないのだ」

「俺には、きみの携帯番号は判らないし、会社は教えてくれない、特別許可願いを出してきみの携帯につないでもらっただけど、会話は全て記録してチェックされる」

「きみが、忘れもなんかしていないって、言うのじゃないかって、ドキドキだったよ」

「もし、私がそう言ったらどうなったの？」

「会社の諮問委員会で取調べさ、そこへきみがクレームを言えば俺は罰金と職務停止1週間、きみのクレームが大きい場合は免職」

「日給制だから、1週間分給料無くなる、本当にすごいリスクを犯してきみに会いに着てやったんだぜ」

「それって、わたしが会いに来て欲しがっているような言い方じゃない、話し方もなれなれしい」

「いや、なんにも知らないお嬢さんが、困っていると思って、夕方から休み取って来たんだ」

「それはどうもご親切に、私はこのホテルで日本食を食べようと思っていたのだけど」

「高いぜ、ホテルは」

「え、私におごってくれるの？」

「・・・たかるつもりは無いけど、割り勘な」

彼は、ちょっとはにかんだ顔してそう言った。

「だってきみの格好はディオールのTシャツにLVのジーンズ、バックはモンブラン、時計はカルチェ、俺がおごったら釣り合わないよ」

「いいわ、割り勘で、居酒屋でも誘って」

歩いて、品川駅の新幹線側の出口へ、まあまあ流行っていそうな居酒屋へ。

「まずは焼酎の水割り」

ビールとかは大麦が輸入なので高いらしい。

「なに食べる」と彼

「まぐろの刺身」と私

「そんな物無いよ、あっても手が出ないくらい高い」

マグロは捕獲規制と円安で簡単に手に入らないらしい、タイではインドマグロを内緒で売っていく漁船が居るので、よく食べている。

「じゃあ、さんまといわしの刺身、イカそうめん」

「高いけど、あるよ、割り勘なんだから少し安いのにしてくれないか」

値段を見たら、生ものは高い、加工品のかまぼことか、つくね、カニカマのような物がまあまあの値段。

船を使って遠くまで取りに行く食材は、石油が高いので必然と高くなるらしい。

「しかし、メニューで安い物頼んだら、バンコクの日本食レストランの方がはるかにまともな食事になってしまうよ」

「君は、バンコクから来たのか？」

「そうよ、言ってなかったわね、ここは私がおごるから、後のお茶でもおごってよ」

「まあ、それなら・・・」彼はしぶしぶ了解。

値段を気にせず、何でももってこい状態、まわりのお客が唾然とする中、食べ始めた。

「まずい、ってあまり新鮮じゃない」

「そりゃ、こんなの頼む人ほとんど居ないから、冷凍品だよ」

「それはひどいね、まあ仕方ないか」

まあ、適当に平らげて、とりあえずお腹は満足。

お勘定は、5万新円、端末で払うと、彼が「すごい、この店で2人分なのに、俺の月給の1/3だ」

「お茶でもしながら、なにか話そうよ」

「この辺は高いぜ」

「また、その話、お茶なのだから高くてもたかが知れているでしょ」

「わかった、この店は？」

まあまあ、おしゃれなお店、どちらか言うと、スタバのコーヒーが飲みたい気分だけど、そっちはコーヒー一杯3000新円だそうです。

「おまえって、金銭感覚おかしくないか？金持ちに言う言葉じゃないけど、なにか気取った金持ちと違うし」

席に座るなり、彼の一言。

「言われて見れば、日本円は世界通貨の中でも弱いので安く感じるわ」

「私は普段から、香港ドル、中国元やタイバーツを銀行口座で扱っているの、新円は安い通貨と思えるの」

「海外に住んでいる、逃げ出した日本人って、みんなお前みたいか？」

「さあ、私はよく判らない、高校はシンガポールに行っていたし、大学はインドだったから」

「今回、パスポートの件が無ければ、日本に来なかったかもしれない」

「そう言えば、名前聞いてなかったわ、私は三嶋 有華、あなたは？」

「俺は信条 裕也、24歳、リムジンタクシーの運転手」「きみは仕事してるいの」

「私はインドの大学で、経済学を専攻して、今はタイの HSBL(香港上海バンクリミテッド)でリテールの仕事しているわ」

「それで金持ちなのか？」

「給料は少ないわ、金融資産の運用利益で暮らせるのだけど、なにか仕事しろって親に言われて就職したの」「自分の資産運用の参考にもなるので一生懸命やっているわ」

「それって、インサイダーにならないのか」

「就職しているのはタイで、運用は香港なので法律上は問題ないの」

「きみって、何歳なんだ？けっこう若く見えるけど」

「私は23歳で就職したばかり、新米ね」

「それなのに、こんなに金持ちなのか、世の中変だよ」

「親の資産の一部を引き継いで、16歳から運用をしているわ、とりあえず暮らすのには不自由ないくらいのお金は運用利益で稼いでいる」

「住んでいる家も、親所有のコンドミニアムに住んでいるから、お金はいらない」

「なにか、話を聞いていて腹立ってきた」「俺より年下で、生活が違いすぎる」

「俺なんか、日本破産で親は全金融財産失って自殺、残った土地と家売って大学出た、まだ不動産のあった俺はましなほうで、無かった連中はみんな大学辞めるはめになった」

「正規社員になるために、語学すごくがんばったんだぜ」「英語・中国語・韓国語・スペイン語なら、観光案内できる」

「これで毎月残業やって15万新円しか貰えない」「今回は、貸し切ボーナスで3万新円出るから、うれしいけど、複雑な気分さ」

「私の親は、日本が破産したときのリスク分散のために、海外で外貨を運用していたので良かったの、私も子供のころから、資産リスク分散と投資について散々勉強させられたわ」

「親の考え方でこんなに人生が違うって、なにか、納得できないけど、現実だから仕方ない」

「俺だって、金持ち目指すのに投資は考えているのだけど、今は海外へお金持ち出せないし、日本人の国内での投資は、キャピタルゲイン課税50%もあるので儲からない」

「お金に関しては、けっこう勉強したんだぜ」

「だから、さっきインサイダーとか言ったのね」

「やっぱりきみみたいな女の子を捕まえて、逆玉が良いのかな」

「なによそれ、会ったばかりで私をくどいているの？」

「冗談だって、そこまで俺もバカじゃないって」

「50歳になるまでに、インドの田舎で暮らせるだけのお金を貯めて、移住するんだ、持ち出し金額はリタイヤ移住の場合1千万新円これ以上は、税金が50%かかる」

「50歳以上で日本に住んでいたら、10年も生きられなから・・・」

彼は、せつなそうに言った。

「日本だって、これからがんばればなんとかなるのじゃない・・・」最後は声が小さくなったしまった。

私は経済学を学び、日本の将来についての卒業論文を書いた、今のままでは、先進国の中には入れない。

日本で上がった利益のほとんどが、ユダヤ系資本と中華系資本によって無税で海外に持ち出される。

投資という言葉で飾られているが、キャピタルゲインは全て海外の株主に入る仕組みである。

「そろそろ、眠くなったわ、タイからは香港経由で来たし」

「ホテルまで送るよ」彼は席に座ったまま、テーブルの真ん中に表示されているディスプレイに自分の端末を近づけて料金を払った。

ホテルのロビーまで歩いてきた、この時期の日本の夏はタイより暑い、ホテルのエアコンが気持ちいい。

「じゃあ、明日8時半に」

「ああ、間違いなく来るよ、大切なお客さんだから」

部屋に戻って、端末を操作して今日の支払いを確認、ちょっと気が付いたことがあった。システムはこんなに発達しているのに、生活に余裕が無いのはなぜか、支払いに使った金額以外に、ネットチャージなる物が付いている、消費税以外にけっこうな金額だ。

ホテルのキーを使用したのまでチャージされているのには参った。

この国では、人が動く、生活するだけでお金を吸い上げるシステムが出来ている。

この端末はどこ製かな？

裏を見てみたら、IBMチャイナやっぱり。

で、システムの構築とオペレーションの会社は？

端末見ても判らないので、端末からネットサービスへ繋ぎ、Googleって見ると。マイクロソフトのシステムで、CTII Bankが経営する、端末会社が独占しているらしい・・・思いっきり搾取されているわね。

さてと、明日は早くないけど、もう寝ましょう。

今度は、バスタブにお湯を張って、ゆっくり入る。

日本はどうなっているか心配したが、意外とまともだった。

これで、明日、ICチップを貰えば、目的は終わりだ、さっさと済ませて観光しよう。
ドライヤーで、髪を乾かすと、ベッドに入った。

朝、時差は2時間なのでそんなにつらくないけど、体内時計が合っていないので、目覚ましを掛けたにもかかわらず、起きたら8時、大急ぎでシャワー浴びて、服を着るとビューフェでパンとコーヒーだけ食べてホテルのロビーへ。

10分遅刻、あたりまえだけど、彼が待っていた。

「お待ちしておりました」「こちらです」

丁寧なのは良いが、なにか変な感じ。

彼の横に居る、40歳位のちょっとさえない男性が声を掛けてきた。

「このたびは、わが社のリムジンサービスをご利用ありがとうございます」

「わたし、こういうものです」

名詞を差し出されて見ると、カスタマーサービスマネージャーらしい。

「サービスで特に問題なかったでしょうか？」

どうやら、昨日の特別承認での電話のことで確認に来たらしい。

めんどくさいので「いえ、こちらこそ助かりました、ありがとうございます」

話を合わせていないので、無駄なことは話さない。

「そうですか、よければお客様をわが社の顧客リストに登録させていただきたいのですが？」

私の情報端末は観光用なので、情報がプロテクトされているらしい、海外のお客のプライバシーは国家間協定で守られている。

「多分、日本にはもう来ないから、不要だと思いますよ」

「しかし、登録していただくと、色々便利な特典が付きます」

このおじさん、うとうしい、時間ないのに。

「急ぎますので」運転手に早くと言うそぶりを見せて、車に行きかける。

「それでは、また参りますので、その時に」

もう来なくて良いよ・・・と言う顔をした。

「時間が取れないと思いますので、機会がありましたら」

さっさと昨日と同じレクサスに乗り込む。

乗り込むと、彼がにやにやしながら、声を掛けてきた・

「さすがだね、無駄なこといわない、課長はなにかあらを見つけて俺を糾弾したかったらしいが、きみは余分なこと言わなかったの、取っ付く暇も無かった」

「あの年の連中は、若い正規社員を辞めさせたくて仕方がないんだ」

「毎年、評価申告での審査でワースト10%は無条件で首切りになる」

「会社が給料を安くするシステムさ」

「ここで、私が大変ねーと言っても、全然なくさめにならないわね、さっさと用件を片

付けてしましましょう」

そういと、彼はわかったと言って、車を走らせた。

「メガ東京庁まで行けば良いか？」

「昨日、端末でアポイント取っているから、とりあえずよろしく」

メガ東京庁へ着くと、案内にあるロボットに端末をかざすだけで、自分の端末に行き先とナビゲーションが起動して案内される。

公務員は破産前の 1/5 になっているので、多くのことが自動化されている。

端末が「3 番エレベーターに乗って、8 階まで・・・」移動していくたびに説明をする。

室内では、うるさいので皆イヤホンをつけている。

案内にしたがって、ついた事務所はなぜか個室だった。

やはり、気になるので、ポケットに入っているボイスレコーダーを取り出し ON これ
で 10 時間は録音できる。

「こんにちは」中に居る、若い男に声かけると。

「待っていました、こちらへ」

「ここで間違いないですよ？」

普通の窓口で、手続きするのかなと思ったので、ちょっと警戒。

「ええ、そのソファに腰掛けてください」「コーヒーでもいかがですか」

コーヒーは高いだろうと思いながら

「ありがとう、いただきます」

彼は、端末でだれかにコーヒー 2 つと頼むとソファに座った。

「私は、国民管理部調査課の主任をやっています、吉村と言います」

名詞を出しながら、座ると自己紹介した。

「私は、」言いかけたら。彼が「大体判っていますよ、三嶋有華さん」

彼が自分の端末で、テーブルのコンタクトポイントに触れたら、テーブル自体がディスプレイになって、私の履歴書みたいなのが表示された。

生まれた場所から、学校、就職先まで表示されている。

ざっと見ると、金融口座が未入力だった。

「すごいですね、有華さんは日本の学校はほとんど行ってないのですね」

私は、小学校に上がる前に、父の仕事の関係で海外へ、中学は 3 年の時に日本へ戻ったのだけれども、高校受験の前に、今住んでいるタイへ引っ越した。

そこへ、秘書のような女の人がコーヒーを持ってきた。

「インスタントですが、これでもいけますよ」

その女性は、私をにらむと、さっさと出て行った。

「すみませんね、彼女、金持ちを極端に嫌っているのです」

今日の私の格好は、タイでオーダー仕立ての、ジムトンプソンのスーツにケ・ドルセーのローヒールパンプス、バックは昨日と同じモンブラン、時計はスーツなので実用的な

ロレックスのデイジャスト・・・そんなに高級な物身に着けていないはずなのだけど。

「金持ちに見えます？」

「十分見えますよ、いまどきの日本で輸入品だけで身を固めている人は少ないですから」

「6年前だったら、普通かもしれませんが」

「それに、この部屋まで来る人は、それなりの人ですからね」

「まあ、それはさておいて、私の目的はパスポートの更新」どうすればいいのですか？」

「あわてないで、ちょっとお話しませんか」

時間が無いわけではないが、せっかく観光案内頼んでいるので時間はあまり取られたくない。

「少しくらいなら」

「じゃあ、手短じかにお話します」

「あなたの登録書類は、日本に来られる前に書留電子メール（暗号化されて送られる）で受け取り、手続きはほとんど完了しています」

「国税局から、あなたの口座の金額が少なすぎると指摘されました」

「脱税の可能性がある」

やっぱり、そうきたか、この辺は予測済み。

「私は現地で現地採用の人間です、そんなに給料が良いわけではありません、年収2万ユーロなら普通ではありませんか」

「日本新円で換算すると、3千万新円なのですが、まだ給料貰って3ヶ月です、口座金額が少ないと言われても」

「それでも、私の年収の2倍はある、あなたは親御さんからの資産は受け取っていないのですか」

「うちの親は、両方とも健在で、お前は自分で働けるのだからお金は相続せずに寄付するって言っています」

「そんなことは無いだろう、絶対持っているはずだ！」急に声が大きくなった。

私の親は、海外駐在中に貰ったお金は日本には送らず、海外の銀行で貯め、海外の証券会社やファンド、保険会社を通じて資産を増やした。

日本からの送金記録は無い。

犯罪性が高いとされると、裁判所から海外の銀行に対して口座の開示を求められますが、破産後の日本政府の力では、海外銀行の情報開示拒否権の方が強くままならないことは、知っている。

「いえ、私の資産はこれだけです、家は父の物ですし」

冷静に答えた。

彼は、やれやれと言った感じで、急に落ち着くと言った。

「今の日本国のレベルでは、これ以上調べられないので、しかたが無いですね」

「あなたが、この会話を録音しているのも知っていますよ、変なことは言えませんね」
なんと、私の動作は役所に入ってから全てモニターで監視されていたらしい。

「さすがですね、テロ対策ですか」ちょっと嫌味を言ってみたが、めげる人ではないでしょう。

「まず銀行のステートメントから、あなたの口座にあるお金の20%を納めてもらいます」

「今後、年収の25%が所得税、国民保険は20%です」
判っていたが、頭にくる。

「私は、所得税をタイ政府に払っている、また追加で払うの？国民保険って実際は形骸化していて、民間保険や現金でないと医者には診てくれないって聞いているけど」

「それに、私は日本での診療は受けることはないわよ」
彼は冷静に続けた。

「日本の政府は IMFに借金があり、日本国籍を持つ人から税金を取る人頭税に変わったのです」「50歳以上は、福祉が全て外れることにより海外在住者は無税です」「50歳までは、公共の病院では無料です、こんな国は少ないですよ」

「公共の病院では、まともな医者はいないと聞いたわ、大丈夫なの？」

「そこまで知っているなら、税金だと思っておくのが良いですよ」

うーむ、こんな重税で国民は暴動起こさないのだろうか？

「一つ確認だけど、税金を払うのに外貨を為替しないといけない、ここでの税金も取るのじゃないでしょうね」

「納税の外貨には、税金掛からないし、外貨で収めてもらえば良いですよ」「日本政府は外貨を欲しがっていますから」

「あと、あなたの銀行口座でのキャピタルゲインにも60%の税金がかかります、毎年銀行ステートメントを、指定した場所へ送ってください」

「判ったから帰る、あなたと話していると気分悪くなる」

「早く、ICチップ渡してよ」

彼は、封筒から小さなチップと、携帯端末を出してテーブルに置いた。

「あなたの海外口座からは、引き落としが出来ないので、常に電子マネー入れて置いてください」「観光用の端末は空港で返せば、端末のお金返ってきます」「しかし、あなたはこの端末に登録されたので、海外への持ち出しは100万新円までです」

彼はちょっとにやっとした、またまた、ムカッとしたが・・・ここは抑えて。

「判ったわ、持ち込んだお金は日本で使っていけてことね」

「パスポートの更新は、バンコクでこの端末を使えば良いのね」

「それだけ、判ればもうここには用はないわ、帰るわね」

立ち上がろうとすると、彼はちょっと制して。

「どうだい、僕は5時に仕事終わるので、観光案内しようか」

「残念でした、もう案内は頼んであるの」

「あの、タクシーの運転手かい」「彼はろくなやつじゃないぞ」

もう、頭にきた、全部この公務員には筒抜けなのね、プライバシーも在ったものじゃない。

「あなた、どこの何様が知らないけれど」実際は名刺貰っているのを知っているが、物は言いよう。

「私に干渉しないで」

「僕はハーバード大学の経済専攻で、官僚でもエリートだ、あんな馬の骨とは違いますよ」

学校出れば、良いという物ではない、こう言った、エリート官僚が日本を潰したのだ！

「頭が良いと言うのと、賢いのは違う、もうこの話やめて私は帰りたいのだから」

彼は、しびしびと言う感じで私を解放した。

エレベーターホールまで彼は付いてきたが、私は何を言われても無視、「さよなら」と言ってエレベーターに乗り込む、エレベーターの中でさっきの秘書と鉢合わせ。

とことんついていない。

「どうも先ほどは、失礼しました」彼女は意外と素直に声かけてきた、意外？

「なにかさっきとは違うのね」私はまだ機嫌が悪かったので、兼のある答えをしてしまった。

「少し、お話できませんか」

彼女はちょっとためらいがちに、私を誘った。

「まあ、少しなら話してもいいけど」

私は、日本での用は済んだので時間はそんなに気にならない。

よく見ると、なかなかかわいい女性だ、女の私から見ても、日本女性のかわいらしさがある、毎日タイ人と過ごしている私にとって日本人はちょっと異質な感じ。

こんなこと言っている、私自身は日本人なのだけど、私の方が変なのか。

「時間は大丈夫？ 工作中じゃないの」

「11時から昼休みなので、あと5分で11時になりますので、問題ありません」

丁寧な受け答え、私の方がひどい話し方（反省）

「1階にあるレストランで待っていてください、この書類出したらすぐ行きます」

「判ったわ、待っている」「そうそう、2人だけで食べるのもなんなので、運転手呼んでも良い？ 話の内容によっては止めるけど」

「大丈夫、海外の情報を少し聞きたいのと、私が怒っていたわけを聞いてもらうだけだから」

このレストランさすがに都心東京庁のビルの中にあるレストラン、高級そう。

彼女と別れて、レストランでまずミネラルウォーター頼むと、運転手の彼の電話にコール、入り口でわかる前に、彼の端末番号聞いておいた、もちろん観光端末から掛ける。

「裕也君、1階のレストランに来られる、もちろん運転手の上着は脱いで」「お昼奢るから」

彼は二つ返事で、行くと言って電話を切った。

しばらく待っていると、秘書の彼女が来たので、手招きする。

彼女が座ると、ここは奢るからと、まずミネラルウォーターを注文。

水が来る前に、裕也君が来た（いつの間にか名前と呼んでいる）。

「あれ、なんで女性2人なんだよ、俺あんまり女性に免疫ないから、あせるよ」

「なんでも奢ってあげるから、座って」

「えらく景気がいいね、なにかあったの」と彼。

「持ってきたお金、使ってしまったといけないの、100万新円しか海外へ持ち出せないことになったの」

「それは、豪華な食事が出るね、最初に残高見たとき桁、間違っているのじゃないかって、思ったし」

「やっぱり、見たな！失礼よ！」

「ごめん、職業柄色々チェックを入れるんだ」

この会話を、横で啞然と見ていた彼女が

「貴方たち、恋人同士？」

「ちがう、ちがう、昨日食事しただけの知り合い！なんでもないよ！」私。

「えらく、強調するな、まあそうだから仕方ないけど」

「紹介するわね、彼がリムジンタクシーの信条裕也くん 24歳」

「私は三嶋有華、22歳」「一応日本人、住民票は日本に無いけど」

彼女も自己紹介

「私は、吉田瑞希（よしだ みずき）23歳、国民管理部調査課の庶務です」

「じゃあ、まずは食事のオーダーね」

「メニューの中で、美味しそうなのは・・・」

「よし、ステーキロインステーキ！もちろんオージービーフ？」

「役所は、未だにUSビーフ使っていないでしょ」

「輸入品は高いって、国産牛は農家全滅してしまったし」彼。

他にスープとかサラダの注文を終えると、ミネラルウォーター飲みながら、彼女と話し始めた。

「で、なんの話だっけ」私。

「その一、私が怒っていた訳だけど」と彼女。

「今怒ってないなら、別に気にしないけど、話したいなら」ちょっと意地悪かな。

「私、主任と付き合ってるんです」

「あの、感じ悪いのと！」言っちゃった。

「主任、本当はいい人なんです、ちょっと学歴鼻に掛けていますがけど、やさしいし」

なんか、のろけを聞かされている気がしてきた。

「3日前に、あなたの情報が送られてきたて、彼ったらそれを読みながら、この子をものに出来ないかなって、私の前で言うの」

「この気持ちわかりますか？」

そんなー、私に言われても困る、私はあの主任のことなんてなにも知らない。

「世間知らずの、お嬢さんでなくて良かった、けっこう気が強いし、しっかりしていらっしやいますね」

褒められているのか？どこで見ていたの。

「メガ東京庁の中は、テロ対策の為に、全ての場所がモニターされているの」

「ただ、音声はモニターできないけど」

テロ地策って言葉でなんとなく納得させられるようになっているけど、この言葉で送金規制とか監視緩和、ネット監視局、共謀罪が成立してしまい、危なくて本音で議論できない。

これは、日本に来る前に、ネットで調べておいたから知っている。

「あなたが、彼を突っぱねたから、すっきりしたわ」

「彼、野心家で金持ちになって日本を早く脱出するつもりだって、言っているの」

「今のままでは、私たち結婚しても子供も作れない」

「でも、結婚の約束はしているのね」と私。

彼女はちょっと照れた、顔をした。

ちょっと話しているうちに、サラダとかぼちゃのスープが運ばれてきたので、食べながら話をした。

「有華さんの住んでいる、バンコクってどんな所ですか？」瑞希。

私は、色々話し始めた。

「けっこう暮らしやすいけど、車の渋滞は相変わらず、首都交通は整備されて、スカイトレインや地下鉄で大体の所へは早く移動できる」

「今、チェンマイを経由して、ラオス、ベトナムのホーチミンまで、インターシティー高速列車を建設中、中国の元借款だけど、建設しているのは、マイルリンチ鹿島で、アメリカの会社」

「飛行機で十分な気がするのだけど、建設業は景気を良くするカンフル剤みたいなものだから、建設ラッシュになっているわ」

「今では、世界の外貨準備国の中国も投資先を求めているし」

「食品と衣料品は安いわよ、衣料は冬物いらぬから、特に安く生活出来るわ」

「医療も民間の保険会社に入っていれば、高度な医療を受けられるので、ヨーロッパやアメリカから、バンコクの病院へ、高度医療を受けにたくさんの人があるの」

「病院が株式会社になっている、こう言った病院は金持ち相手だけどね」

「アメリカ、ヨーロッパ日本に比べても、安く、安全をもっとうにタイは医療立国とし

て有名になっているわ、ただ気をつけないと、オプションでやりすぎるのが最近問題になっている、なにせ民間会社だから」

「私は、リテール部門の仕事をして、タイからインドへの投資が盛んで、インドにもよく行く、世界は、中国、インド、東南アジアの時代になっている」

「タイ湾では、光触媒による水素プラントの実験も進んでいて、これの投資が今後伸びるでしょうね、本格的な稼動になったら、産油国との摩擦が起こる可能性がある、タイ政府は軍隊の増強をしているわ」

「本当はこの技術、日本の会社が開発した物なの、でも、あの日本政府破産の時に会社ごと海外へ逃げてしまった、タイの事業家が無条件でお金を出したのでアメリカに行かずにアジアに残すことが出来たの、世界のエネルギーはこのアジア連合が握る」

「日本は、いまの状況では参加させてもらえないけど、中国、インド、タイの合併事業になっているの」

「まあ、未来は明るいんじゃないかな」

住んでいる国の話や経済の話をしているうちに、メインの食事が来た。

「うまそー、こんなステーキ何年も食べたこと無いぜ」裕也が叫んでいる。

「あなたは、投資とかしているの？」彼女が聞いた。

「……」私はちょっと考えた。

音声はモニターされていないはずだが、なにか引っかかる。

大学で華僑の親友が言った言葉を思い出した、財産の話は慎重に、他人は全てお金の敵。

「うん、ちょっとお小遣いでインドの株を買おうとは思っているのだけど、まだ給料そんなに貰ってないから」と言ったら。

裕也がなにか言いかけたので、「ちょっと黙って！！」私は、彼をにらんだ。

彼は驚いて、ステーキを口に持って行き損ね、落としてしまった。

私は、横に座っている彼女のブラウスの胸元を見ると、そこに手を突っ込んだ。

「きゃー！」彼女は叫んだが、私は彼女の胸元からペン状のボイスレコーダーを引っ張りだした。

「やっぱり」「また彼に頼まれたのでしょ」

彼女は真っ赤になると、うつむいてしまった。

私はボイスレコーダーのスイッチを切りながら「怒らないから、本当のこと言って」

彼女はぼそぼそと話をし始めた。

こう言うことである。

彼女が書類を持って職場に戻って、彼に私とちょっと話す機会があるって話をしたら、彼はボイスレコーダーを渡して、私の投資口座や運用について聞くように言ったらしい。

彼女が断ると、婚約解消するって言ったそうだ……

私はもう完全に怒った！

なにか仕返し、してやらないと、気分よくバンコクに帰れない。

彼女には、悪いようにしないからと言って、彼の携帯番号と彼女の番号を聞いた。

「彼には、話聞く前に急用が出来て帰ったから、あまり話せなかったと言えいいわ」

「それと私が、今晚主任と食事をしたと言っていたから携帯番号教えたって伝えて」

「5時まで電話するわ」

「さあ、裕也君行くわよ」立ち上がろうとすると。

「ちょっと待ってくれ、まだステーキ食べてないよ」

「時間無いから、途中でパンでも食べながらでいいわ、行くわよ！」

「そんなー、こんなステーキもう食べられないかも」

彼はしぶしぶ、ついて来た。

さてと、準備しなくてはいいわね。

車に戻ると、バックから携帯パソコンを出した。

パソコンはエリクソンソニーの Uシリーズの最新型、直径3cm長さ25cmの筒のような形をしている、ディスプレイは無機 ELで中に巻き込まれているので引っ張り出し、レーザーキーボードを手前に展開させる、レーザーマウスを人差し指に装着。

「携帯端末でネットにアクセスできるわよね」

携帯端末そのもので、ネットにつないで、何でも調べられるよ、なんでパソコンでアクセスするの？」彼は不思議そうに言った。

日本では、携帯端末を持つようになってから、端末自体がネットにつながっているのだから、パソコンを持つ人は減った、値段が高いのもあるが、携帯端末は政府から無償でもらえる。

私は、観光用の携帯端末に光ケ - ブルでつなぐと、ネットにアクセスしようとした・・・携帯端末の燃料切れ表示が出て、燃料補給するよう表示している、この忙しい時に。

「この辺に、メタノールカートリッジ売っている所ない？」彼に聞いた。

「そんなもの、どこでも売っているさ、そこのセブンイレブンでも」

すぐ買ってきて、カートリッジを交換、どうやら観光用なので FULLになっていなかったらしい、普通は一回の交換で1ヶ月は使えるはずだ。

「もう一個買った携帯端末あるのだから、そちらを使えばいいのに」彼が言った。

「だめ、アクセスの記録はなるべく取らせたくないから」

カートリッジは一度つけると、安全のため交換表示が出るまで外せないようになっているからしかたがない。

もう一度、ネットにアクセス。

「いるいる」私にやけながら、操作していると。

「さっきからどこにアクセスしているんだ」

「ちょっと、インド大使館」

私は、田と言う暗号化ソフトを使って、メールを送った。

しばらくすると、パソコンの IP電話にスクランブル音声で電話がかかってきた。

リアルタイムでスクランブル解除ソフトが通常の音声に変換してくれるので、普通に会話できる。

"Hello, MR. Barathendera, you are I fine"

"As for after a long time, Ms. Yuuka, you where are you that are? "

"I am coming in Japan now. "

英語だと、書くのも読むのも面倒なので、日本語で。

“日本に来るなら、先に連絡くれれば迎えに行ったのに”

彼は、インド大使館職員、大学の先輩だ。

“ちょっとだけ来て、すぐ帰る予定だったので連絡しなかったの”

“で、いったい何の用だい、暗号メールで来るし、IP電話もスクランブルで掛けるようになって、重大な話かい”

“今日、夜に時間取れる”

“おっと、デートの誘いかい、僕は妻帯で赴任しているから、不倫になるぞ”

男がスケベなのは世界共通だ・・・

“私は今日の夜、シナプリの34階にある中華レストランで食事するので、来て欲しいの”

“奥さんも一緒にいいわ、全部奢るから”

“なにか怖いな、お金にはけちな君がそんなこと言うなんて”

“けちは余分よ、節約家って言ってよね”

“席は2つ予約、隣の席である男性と食事するから、見守っていて欲しいの”

“なにか悪巧み考えているな、犯罪はやめとけよ”

“大丈夫、ちょっとお灸すえてやるだけだから、危なくなったら助けてね”

“今夜、8時私の名前で予約しておくから、来てね”

“わかった、また時間があったら家に来てくれ、ゆっくり近況でも話し合いたい”

“時間あったらね、じゃあね”

IP電話を切ると、ホテルに予約。

さて、次は。

ぼかんーとしている、裕也君に、「原宿へ行くわよ」

「なにをするつもりだい」彼も英語判るから、だれと喋っていたかは判ったらしい。

さっきのセブンイレブンで買った、パンかじりながら、聞いてきた。

「今日のお昼はごめん、夜、シナプリの中華どう」

「え、俺も行くのかい？」

「車は3日間貸し切でしょ、残業付ける？」

「べつにかまわないけど、一人で食べるのか？」

「吉田瑞希さん呼ぶから、2人で食べたら」

「席は、離れたところを取っておいたわ」

「彼女嫌がらないかな？けっこうかわいいけど、彼氏いるし」

「その彼氏と私がデートするのよ、彼女来ないわけないでしょ」

「なにか面白そうなことになっている気がするけど、先が読めないよ」

「ちょっと待って、2人に電話するから」

主任の彼は二つ返事だったけど、彼女はしぶしぶだった。

私が来ないと、怒るよって言うのと了解した。

「裕也君、彼女を役所までエスコートに行つてよ」

「それも、俺にやらせるのか？こんな格好でホテルのレストランへ行けないよ」

「だから、デパート行くのよ、私の服と、あなたの服買うの」

「君に付き合っていると、面白いね、なにが起こるが想像つかない」

「まずは、君の服、ハラジュクハウスの3階へ」

「なんで、日本に来たのが初めてのよ様な君が、ショッブ知ってるんだい」

「今はネットで何でも判るわ」

「端末のパケット使用料金けっこう高いから使わないよ、生活で使う分だけでも給料の1/5になってしまう」「会社仲間では、給料の1/3になるやつも居るくらいだ」

「貧乏人ほど、搾取のシステムに気がつかないのよ」私がそう言うと、彼はちょっと機嫌悪くして。

「どうせ、俺は貧乏人さ」

怒っている所も、かわいい。

一日しかたってないけど私、けっこうこいつに入れ込んでいるな、いけない、いけない。

店に入りながら「服は私が選んでもいいわね」

「君が買うんだから、文句言わないよ」

「服は、そんなに高くないところで、バーバリーブラックレーベルのスーツ、ワイシャツとネクタイはエルメスでいい、これ」

「靴は、ヴィトンの革靴」

「ちょっと、高すぎないか」

「かまわないわよ、どうせ海外に持ち出せないし、必要ならカード使える」

そう言ってから、ふと思うことがあったので、カード払いに。

「さあ、着替えて、今の服は紙バックに入れて」

そくそくと、着替えさせると次の店。

「今度はどこへ行くんだい」

「その格好で、Gショックは合わないでしょ、時計買いに行くわ」

私は、男の子(人か)の着せ替えにはまってしまった、面白い。

「時計は、ブランドだと嫌味になるから、SEIKOでいいでしょ」

「もう、なんとでもしてくれ」

「グランド SEIKO 手巻きが良いわね、じゃあ皮ベルトのこれ」

ここも、カード払い。

「なかなか、さまになっているわよ」けっこう良い、こんなにハンサムだったかな。

「私は、AUMUSのマーメイド・ドレスでいいわ」

「靴は、ディオールのパンプス」

「さすがに、これは着て歩けないので、ホテルで着替えるわ」

「さあ、ホテルへ行くわよ」

彼はタクシーの制服ではなくなったので、車では後部座席でなく助手席に座った。彼はちょっと照れくさそうに運転している。

「若い女の子を助手席に乗せて走るのは初めてだよ、おばさんはあるけどね」

「ホテルでは、そのままキーを預けて、一緒に来なさい」

「まだ、なにかあるのか？」

「美容院で髪の設定！」

「俺も？」

「そう、せっかくだから」

私が面白がっているのが気に入らないらしい。

さて、ホテルから彼を送り出すと、私はシャワー浴びて身支度。

ドレスが黒だから、下着もストッキングも黒にした。

鏡の前で、見てみると、胸はけっこう見えているし、ドレスはミニではないけど、スリットが大胆、気をつけないと足の付け根まで見えてしまう。

ちょっと、娼婦みたいな格好かな？まあいいか、今晚だけだし。

時計は最初に着けて来たのブレゲ、バックは黒のグッチで行こう。

ダイヤのネックレスは18WG バンコクでオーダーした物。

よし、戦闘準備完了！

一方、リムジンの裕也君

5時に迎えに行かせたのは、瑞希さんの服を持って行かせた為、彼女は私と同じ背格好だったので、ブラックの袋で渡し、着替えてくるように。

電話では、着替え持って行かせるからって、言っておいたので、彼女はとりあえず、服を受け取って、再度役所へ。

30分ほどしてから、彼女、走って出てくるなり車に飛び込んだ。

「ちょっと、なにこの服」「まるで、ドレスじゃない、ディオールだし、靴はフェラガモ」

「今の日本で、こんなの着ていたら、目立ちすぎるわ」

「それに、役所の更衣室で、みんなにじろじろ見られて、今日はデート！すごい格好っ
てからかわれるし」

「明日、役所へ行ったらうわさになっている気がする」

「早く車出して、みんなに見られるわ」

「なかなか、美人だね、すごくかわいいよ」

彼は本音で言った。

彼女は、顔を赤らめながら「最近そんなこと言われたこと無い」

「あの主任は、言わないのかい」

「彼は、そう言ったことはないわ、なんとなく事務的だし」

「よく、そんなんで、結婚って言えるね」

「今の日本は、共稼ぎでないとお金貯まらない、私は親の残したマンション持っているし」

「相続のとき、親がメインで住んでいたマンションを売って相続税払ったの」

「君も、今は一人なのか？」

「そう、私の親も日本破産の犠牲者なの」

「約束の8時には時間があるし、どこかでお茶でもしない？」

「いいわよ、でもこの格好だと恥ずかしくない」

「彼女から、チップ貰っているし、ホテルからあまり遠くない所にしよう」

「その前に、有華から、これをとって」

彼女に、有華から渡された、カルチェのサントスを渡した。

「これ、貰えないわ」私の給料で買える時計じゃない」

「有華はこれもなにかの縁だからって、断られても渡せって」

「俺だってこれ」彼は腕にはめたGSを見せた。

彼は、ホテルから10分ぐらいで行ける、御殿山ヒルズのレストランへ行くことにした。

入り口で車のキーを渡し、レストランへ行くことを告げると、ホテルマンは彼女をエスコートして車から降ろし、俺は隣に立ってロビーを横切り、エレベーターで最上階へ。

「なにか、変な気分だな、いつもは車で待っているのが普通だけど、車預けてレストランへ行くのって」

「私だって、車でホテルに乗り付けるのって初めてよ、なにか恥ずかしかったわ」

レストランに着くと、係りの人が案内してくれて、窓際の席へ。

「せっかくだから、君は少しお酒でも頼もう、僕は(いつの間にか、僕になっている)車だから、ノンアルコールビアにするけど」

「こんなレストランは二度と来られないから、カクテル頼むことにするけど、なに頼んでいいか判らない」

俺は、有華から貰ってきた、メモをちらっと見て。

オーダーをした。

「彼女にブルーマルガリータを僕は車なので、ノンアルコールビアを」

ウェイターは職業柄か、俺たちを上から下まで眺めてから、にこっと笑って「かしこま

りました」

顔には出さないが、値踏みしてるんだろう、俺もリムジンタクシーの客は持ち物でチェックする、本当の金持ちはチップ弾んでくれるから、ウエイターの気持ちはわかる。

「愛想いいわね、ここのウエイター」

「たぶん、俺たちの格好見て対応していると思う」「彼らには金持ちに見えるのだから」

ウエイターがカクテルとビアを運んできて、丁寧に置くと「ごゆっくり」と言って、また微笑んで戻っていった・・・自分も同じことやっているのかと思うと、すこしいやになった。

俺たちは、飲みながらけっこう楽しく話した。

「このカクテル、美味しいよく何がいいか知っているわね」

「有華の受け売りなんだ」そう言いながら、彼女の前でメモの裏を見たら（このカクテルは恋人にささげる飲み物、しっかり物にきなさい）げ！なんてこと書いてあるんだ。彼女にしっかり見られた。

「有華ってあなたの何なの？」「わたし、変な気分になっちゃった」

「変な気分？」俺はちょっと驚いて訊いた。

「だって、男の人とデートしているって、こんな楽しいの」「表現が難しいけど、わくわくする」

「俺だって、楽しいよ、ドキドキだけど」「高校の時以来だよ、女の子と親しく話すの」

「さっきの質問の答えは？」

「え、困ったな、だって彼女はお客だし、ただそれだけ」

「最初見たとき、恋人どうしかと思ったわ、すごく楽しそうに話していた」

なんか、有華に巻き込まれて思っても見ないことが起こっているようだ。

それから、小一時間、身の上話みたいなこと話した、こんなに自分のこと話したことは無い。

有華に魔法でも掛けられたみたいだ。

「さて、そろそろ時間だ、30分前に来てくれって聞いている」

端末で会計を終えると、出口に行ったら車がスタンバイしていた、俺がどこにいるのかは、端末を持っていると筒抜けだ。

ホテルマンからキーを受け取ると同時に、もう一人のホテルマンが助手席のドアを開けて瑞希を乗せた。（いつの間にか、名前だ・・・）

エンジンを掛けようとしたら、有華から電話。

「裕也、車はホテルに預け、チェックインきなさい」

「え！」俺は驚いた。

「お酒も飲むでしょ、それに明日も貸し切りだから」ホテル代は先払いしてあるから、チェックインするだけでいいわ」

「めったにホテルなんて泊まらないから、よろこんで泊まるけど、なんでそこまで」
「面白いからよ」有華。

少し不満だが、女の子とデートもしているし、文句言ったら罰当たるよな？

プリンセスホテルに到着、キーを預けベルボーイに今日チェックインを伝える。

事務的に、キーを受け取ったが、なにも言わない。

こんな、格好をしたかわいい女の子連れでチェックイン、男のスタッフの心情はわかる気がする、いつもは俺の立場だ。

彼女に「ちょっと待っていて、有華にここに泊まるように、言われているんだ」

「え、そうなの・・・」彼女の顔が曇った。

「違うって、変な勘違いしないでくれよ、これからお酒飲むらしい、そんなことは・・・」
ちょっと口ごもってしまったのは、心の片隅にちょっとした期待感があったのは、うそではない。

「明日も、俺のタクシー貸し切りなので、朝早いし」俺なに言い訳してるんだ。

彼女をソファで待たせて、チェックインカウンターへ

「すみません、信条裕也って言いますが、チェックインお願いします、予約入っているはずです」

受け付けの女性はいこやかに、ホテルの端末をたたくと「はい、承っております」「お客様の端末をこれにタッチしてください」カウンターのプレートを指す。

「ピッ」と音がして、レジストレーション完了。

「部屋番号はエグゼクティブタワーの3001 30階のスイートです」

俺「・・・」絶句した。

「なにか、間違いではないですか」

「いえ、スイートルーム2名さまで、承っております」「お連れ様の端末もお願いします」

俺が、あたふたしていたら、彼女（瑞希）が来て「どうしたの？」

「有華のやつ、スイートを俺と君で予約している」

彼女もあぜんとした顔したが「面白いじゃない、こんなホテルのスイートは見たこと無い、見るだけでもいいわ」

こう言うときは女の方が大胆だ。

俺が、どきまきしていると、彼女は自分の端末を出して、「ピッ」

受付の女性は、2人の情報をちらっと見たが、にっこり笑って「朝の食事は、各レストランで端末提示してください、レストランの案内は部屋にあります」

「信条様、有華様から、メッセージがありますので、端末のメッセージをご覧ください」
さっきのレジストレーションの時、メッセージが転送されている。

「では、ごゆっくり」

「ありがとう」と俺。

メッセージを読む。

“ 部屋まで行ったら、連絡して、そこへ行くから ”

「 とりあえず、部屋へ行こう、有華が待っている 」

返信を行い、エレベーターホールに。

エレベーターの中で端末をディスプレイ表示に近づけると、表示に10階以上の宿泊客フロアのボタンが表示された、30階のボタンを押し、彼女を見た。

ちょっと彼女、酔っているせいか、色っぽい・・・ダメだ、そう言うのじゃない。

自分で言い聞かせるが、こんなシーンは映画の中でしか無いと思う。

乗り合わせている、人は外人ばかりだ、30階までに全員降りてしまった。

部屋のキーは不要で、端末持ったまま、ドアノブに触れると、カシャと音がして、ロックが外れる、中に入ると、広い。

リビングと寝室が2つ、こんな部屋に一人で泊まれって？

「 すごい部屋ね 」 彼女は感心した感じで、ソファに腰掛ける。

俺は、どこにいればいいの、困っていると、「ピポー」と部屋のベル。

有華だ、ほっとしてドアを開ける。

そこで、また絶句・・・

すごく大胆な格好をした、有華がいた。

男なら、だれでも誘惑されそう。

「 どう 」 (有華)

「 どうって・・・ 」 困っていると瑞希が来て「 すごいわねー、別人かと思った 」

「 さーて、手短かに話すわよ 」

「 34階の中華レストランに裕也の名前で予約しているから、お酒でも飲みながらゆっくり食べていて 」 「 多分、なに頼んでいいか判らないと思ったので、料理は注文してあるわ 」

「 紹興酒 OKね 」

「 席は、一つ飛ばして後ろ側、席は暗いしその格好なら、主任にはわからないわ 」

「 ただし、なにがあっても、絶対声かけないこと、これだけは約束して 」

「 もうレストランへ行って、判った！ 」 と私。

「 その前に、このレシーバー赤外線タイプだから、盗聴の心配はないわ、2台ね、耳に引っ掛けておけば聞こえるわ、私の髪飾りがトランスミッター、室内で10m以内なら会話聞けるわ 」

「 さて、時間だ、主賓をロビーまで迎えにいかなくちゃ 」

マシンガンのように、しゃべった後、俺たちがなにも言わないうちに、有華は足を大胆なスリットのから覗かせながら、急いで行ってしまった。

「 俺たちも行こうか？ 」

「 いやなら、部屋で待っていてもいいぜ 」

「絶対いく」瑞希はきっぱり言った。

「ここまで来たら、有華に付き合うわ、こんな気分は小さいころのクリスマスみたい」

「わくわく？」

「そう」

2人は、急いでレストランへ出かけた。

午後8時、ホテルのロビーで、例の主任が待っていた。

ふーん、まあまあの格好、ブレザーはアルマーニかしら。

彼のすぐ側まで行ったが、気がつかない。

「こんばんは」私が先に声をかけた。

彼は、ぎょっとした顔で。

「ああ、きみ・・・別人かと思った」

「馬子にも衣装でしょ」「行きましょう、エスコートしてくださる」

彼の左腕を取ると、ちょっと体を寄せた。

「急に、僕と食事したいなんて、どういう風の吹き回しだい」

「日本のエリートさんとは、仲良くしておかないと」

「さすが、君は賢い」

エレベーターの中でも、彼の近くに寄り添う。

レストランの受付で、私が「吉村で予約したものです」

「はい、承っております」「案内の物が来ますまでお待ちください」

「ちょっと、僕の名前で予約かい、こんな高い店、奢れないよ」

「大丈夫、支払いは全て私がするから、気にしないで」

「レストランの予約は、男性の方がカッコウつくでしょ」「これでも、日本女性よ」

係りの人に案内されて、席に着く。

私の座った席からは、すぐ向こうのインド大使館の夫婦、その向こうは裕也と瑞希、ゆったりお酒飲んでいるようだったが、私たちが来たら、瑞希はこちらをじっと見ている。

「お酒、飲める？」私。

「大丈夫だ、お酒飲むのは久しぶりだが」主任。

私は、ウェイターを呼ぶと、紹興酒をボトルで頼んだ。

「君は、日本に帰って来る気はあるのかい」

「今のところ、全然ないわ、仕事は海外だから」

とりあえず、話しても当たり障りのないことを選びながらの会話。

お酒もだいぶ入って、主任の視線を大きく開いたドレスの胸に感じつつ。

「君は、日本の男性どう思う」

「生活は大変そうだけど、努力している人は好きよ」

「僕なんかどうだい」

私はちょっと酔ったふりして、前のめりに姿勢をくずして、上目使いで(撒き餌だよ)

「悪い人ね、あなたには結婚を約束した人居るでしょ」

「そうか、瑞希と話したって聞いたが、そこまで話したか」

「そう、彼女あなたの為に、スパイまでやろうとしたわ」

「いや、僕はなにも頼んでいないよ」

彼は落ち着いて話している。

「だから、彼女裏切ったらダメでしょ」

流し目しながら、ちょっと奥の裕也達を見た、彼らは食事も上の空で会話聞いている。

「彼女のことはなんでもないんだ、彼女と結婚して、彼女のマンションを売ったら別れるつもりだった」「都市部での不動産はものすごく高いからね」

後ろの席で、瑞希が立ち上がろうとしたが、裕也が手を握って抑えている・

ちょっと残酷だったかな・・・

紹興酒ボトル2本目頼んで、「なかなか策略家ね、もう少し飲む」私。

「君はお酒強いね」と言いながら彼も飲む。

やっぱり、思ったとおり、負けず嫌いな性格だ、特に女性に対しては自分が上だと思っている。

「君は僕のことどう思ってるんだ」

「ただの役人」さらっと私。

「ひどいな、そんな言い方、僕を誘った理由があるだろ」「特にそんな格好で」

ますます確信、こいつ相当な自信家だな。

「まあ、理由は無いことも無いけど」

彼は少し笑うと「君となら、良いパートナーになれそうな気がするのだけだな」

口調がちょっと変わってきた。

「私は趣味じゃないわ、あなたぐらいの人なら、履いて捨てるくらい居るわ」

「ここまで、話させておいて、つれないな」

彼は、自信たっぷりにポケットから一枚の電子ペーパーを出した。

「君は、今日の買い物でカード使っただろう」

そーら来た！

「カードの引き落とし先は海外で情報は取れないけど、このカードはプラチナカードだね」

私は、ちょっとひるんだ顔をした。

「君の口座では、このカード作れないことぐらい、ちょっと調べれば判るよ」

「・・・」黙っている、私。

向こうで、裕也が驚いているが、私は首を横に振って来るなど。

主任はそのしぐさを見て、私が弱気だと思って、さらに押してくる。

「この情報から、脱税容疑で身柄拘束させるよう、要請も出来る」

「それで、私にどうしろって言うの」

「ここから先は、君の部屋で話そうか」

彼は、立ち上がって私の手を取り、引っ張った。

「キャー、止めて、行かないわ！！」大きな声出す私。

すぐ後ろの席のインド大使館員 Mr.バラチャンドラがすくっと立ちこちらに来て、彼の手を持った「ご婦人が嫌がっている、やめたまえ」と主任をにらんだ、インド人がにらむと怖い。

「うるさい、これは内輪の話だ！」自分が優位に立っていると思っている主任は、彼(バラチャンドラ)をつき離れた。

なぜか、バラチャンドラは後ろに大きくひっくり返り、いすを飛ばして大きな音をたてた。

「暴力を振るうな、警備員を呼べ！」彼が大声で叫んだので、店の中が騒然となった。店のスタッフは彼の素性を良く知っているので、フロアマネージャーと警備員(この時代、警察が委託で警備も行っている)が駆けつけると、主任はがっちり捕まってしまった。

「私はこの男を訴える！」Mr.バラチャンドラが言う。

「そんなこと出来るものか、おれは公務員だ」

フロアマネージャーが「静かにしてください、他のお客さまの迷惑です」「それに訴えると言っているのは、インド大使館員の方ですよ」

彼はぎょっとした

「おい、お前なんとかしろ」私にすごんだ。

「おまえ、逮捕してやるぞ」まるでやくざだ。

「その、書類意味無いわよ」「私の使ったカードは中国交通銀行発行のファミリー・ブラチナム、架橋が好んで使うカードで、ある条件を満たした者だけが作れるの、親の名義での発行、それは証明できるわ」「日本ではこんなカード無いでしょうから、使ったのよ」

私は、仁王立ちになって言ってやった。

「最初から、そのつもりで使ったのか？」

「それは、想像に任せるわ」「言葉は慎重に使うものよ」

主任は、うなだれて、警備員に連れていかれた。

「ありがとう、Mr.バラチャンドラちょっと芝居しすぎな気もするけど」

「君の思惑通りになっただろう」

「Mr.バラチャンドラ本当に訴えるつもり、彼、懲戒免職になるわよ」

「おいおい、そのつもりで私をここへ呼んだのだろ」彼は笑った。

「ちょっと、お灸をすえてやるだけでいいの、電話して訴えないから私に近づくなって言うておいて」「放って置くと、自殺するといけないから」「死んだら後味悪いでしょ」

「君を怒らせると怖いよ、わかった明日の朝連絡しておく、お前だけには気をつけないと、つくづく思うよ」

「そんなことないわよ、私はおとなしい淑女だから」「バンコクに来たら、連絡して美味しいタイ料理おごるから」

「そのうちにな、MKスキでごまかすなよ、シーフードタイ料理だぞ」

「私の家で、作ってあげるわ」

彼は、やれやれと言う仕草をすると席に座った。

私は、彼の横に座っている奥さんに会釈した。

“ Ms.有華、お久しぶり、私たちの結婚パーティー以来ね、こんど食事においでなさい ”
英語で話しかけられる。

“ ありがとう、Mrs.こんど時間を取って行かせてもらいます “ 私も一応英語。

さーてと、こちらからフォローがいるな。

その後ろの席で、ポカーンとしたまま、成り行きを見ていた2人のテーブルへ行く。

手を握り合ったままの2人を見下ろして「食事終わったら、上のラウンジへ行かない」

「あ、そ、いいけど、俺、なんて言ったら」真剣に悩んでいるところがかわいい。

私は、彼女を見ると、彼女はびくっとして、怖いものでも見るような目で私を見た。

「ごめん、私はあなたを傷つけたくなかったのだけど、あなたはあんな男に引っかかって、人生棒に振ることはないわ」

彼女は、ちょっと納得した顔をして、表所の硬さが取れた。

「よーし今晚は、一緒に飲もう」「裕也は貸し切りだから問題ないけど、瑞希あなた明日有給取りなさい」「どうせ、主任も休みだろうから」

「俺自体は貸し切りではないぞ！君はタクシーのお客だ」ちょっと意味ありげに裕也が反論した。

その夜は、3人で楽しく飲んだ、一日しか経ってないのに、長年の友人のように。

3人とも、この日本には心配する身内は居ない、夜中まで、色々将来のことも含め語り合った。

「さーて、もう夜中だし寝ようか」私。

私は、彼の方だけ見ながら、ウインクした。

彼は、えっと言うような顔をして、また悩んでしまった。

隣同士でぴったり寄り添って座っている二人は、はたから見たら恋人どうしに見える。

「裕也君、明日の仕事は10時からにしてあげる、瑞希ちゃん明日有給取れたら、私の観光付き合ってね」

私はこう言い残すと、そくさくと自分の部屋に帰った。

この後は、私の管轄外・・・明日の朝が楽しみ、小悪魔的な気分だけど、私は一人で寂しいなー。

朝、6時に起きて、観光案内を見てみる、都市間の交通は問題ないが、都市を離れると

治安が保障されておらず、観光地は管理されている場所だけになりそうだ、本当は日本の自然を見たかったのだが、日帰りで行けそうなところは、富士山ぐらいか、上高地や軽井沢は今度にしよう。

もう、日本へ来るつもりはなかったのだが、バラチャンドラとの約束もあるし、今回2人の友達が出来た。

朝食を食べて、8時半にホテルのブティックに、ホテルのお店は、朝8時から開いている。

女性物の下着と、白のカーデガンを買おうと、ホテルのサービスカウンターへ行ってこの服を3001号室へ9時に届けてもらうよう頼んだ。

ついでにメモには、タクシーの制服は着てこないでねと書いた。

部屋に戻ると、バラチャンドラとIP電話で話す。

彼は先ほど、主任と話したそうだ、そうとう落ち込んでいたと言っていた、今日は休むらしい、そこまで聞かなくてもいいのに、真剣に色々相談されて困ったそうで、さすがにそれなら自殺はしなさそうだ。

もう、私に付きまとわないと、念を押しておいてくれた。

今日は金曜日、朝10時、ロビーへ行かなくてはね、私が指定した時間だから。

ロビーへ行ったら、2人が照れくさそうに手をつないで立っていた、彼女は昨日のドレスに白のカーデガンを羽織っている、これならその辺歩いても良さそう。

私は、ロキシーのTシャツと、ジーンズ、リーボックのスニーカー、時計は趣味なのでパティックフィリップスのアクアノート、ラフな感じなので、ちょっと彼らとはミスマッチ。

「さて、今日は日本観光」「明日は帰るから、がんばって行こう」

「で、どこへ行くのだい」裕也。

「時間も無いから、富士山のホテルマウント富士見まで行って、露天風呂でも入ろう」

「また、困らせる気かい、俺は2人の女の子連れだよ」

「だったら、貴方は駐車場であってね」

「それは無いよー」と彼。

車へ乗り、ナビゲーションに行き先を告げると、道案内モードで道を教えてくれる。

私たちは2人とも後部座席に座ると彼に言った。

「出発！時間あまり無いから、法定速度の範囲で急いでね」

「了解」

彼はちょっと不満げだったが、車を発進させた。

「はい、これ」私はホテルのブティックで買った水着を渡した。

「私と同じサイズ、同じディオールオム」「デザインと柄は好みなの」

「急いでいたので、お店の在庫でしか選べなかったけど、気にしないよね」

「行く先の、ホテルにはプールもあるし、露天風呂は水着着用だから」

「俺のは？」彼が運転しながら聞いた。

「あるわけ無いでしょ、運転手なのだから」

「若い女の子の水着姿を見られるのだから、文句言わない」

彼は、むすーっとして運転している、あとでフォローしておくか。

首都高速から東名へ抜ける、高速に上から見る景色は、たくさんの田んぼ、畑が見える。

「瑞希、日本の農業はけっこう復活しているね」私。

「日本の農業は、全て株式会社化して、主にリタイヤした50歳以上の受け入れ先になっている」「私も、うかうかしていると老後は農業の作業で暮らしていくことになるわ」

「俺はその前に、海外へ脱出するさ、できれば」

「そうか、日本の農業って手が！」

私は、バックからパソコン取り出すと、車のテーブルに置いて、スクリーンとレーザーキーボード展開、ネットに繋ぐと、マウスは爪の先につけたレーザーポインターで操作始めた。

農業株式会社の分析と売り上げ、取引先、雇用「まあまあね」

「私、この内容は詳しいわよ」瑞希。

「仕事上、国民の管理部門に居るので雇用に関する情報は多い、50歳以上の雇用のデータ分析もやっている」

「まだ、上場したばかりの会社が多いし、海外からはあまり見向きされていないから、株価安いわね」「日本人で株買う人は、今となってはほとんど居ないようだし」私。

IP電話で香港のファンドマネージャーにスクランブルで電話、意見を求める。

リスクは高いが、将来性はありそうだ。

世界的な、食糧不足に突入している、タイの政府は農業による自給率を300%まで引き上げるプロジェクトを行っている。

温暖化による、砂漠化現象は世界で深刻だが、もっと深刻なのは水である。

地球の水は、地球の総重量の0.02%そのうち、97.5%が海水。

実際人間が使える水は、淡水の1%も無い。

その水の半分近くは北米北部や南米東部、アジアの東部に集中している。

世界の穀物庫と言われている、アメリカ南部での穀倉地帯は砂漠の太陽と100m以上の井戸を使った農業で、数億年かかって溜まった地下水を100年で使いきろうとしている。

「水の豊富な国で、食料の確保をがんばればなんとかなると思う」私。

将来性のありそうな、小さな会社をピックアップ、外貨建てなら、42%の株式買えそうだ。

香港の証券会社に指示、3人の名義で分割購入依頼、証券会社は4カ国に分ける。

今の日本は、外資からの株購入と採決権をOKとしている、日本破産の時にIMFから突きつけられた条件の一つである。

人気がないようで、簡単に買えた。

そのほか、ファンドマネージャーに指示を出しておいた。

すべて、暗号化ソフトを通してあるので、内容は漏れないが、そのうち暗号化ファイルの添付規制はテロ防止と言って、新しい規制が出来るかもしれない。

「なにか、すごいことやってない」瑞希。

「こんなの、日常茶飯事よ、くわしくは、お風呂でも入りながら話そう」

資料とか確認しているうちに、ホテル到着。

端末で予約確認支払い、泊りではないが露天風呂付の部屋確保。

「よーし、まずは食べるぞ」「そう言えば、裕也とは食べていることばかりね」

ホテルの懐石料理食べながら

「まだ、日本は復活できると思うの、ハイテク・金融関連は全て外資に抑えられているけど、農業がある」私。

「そう言われても、ぴんと来ない」裕也、こいつ仲間からはずそうか。

「そうか、それがさっきの水と食料の話」さすが、瑞希。

「日本は島国で、海に囲まれているから、水の心配は少ないの」

「昔の日本で起こった飢饉は、すべて水不足でなく、冷害なのよ、今の技術なら冷害は問題ないと思う」

「それに、豊富な安い労働力・・・ごめんねこう言う言い方」

「でも、俺たちには何も出来ないぜ、下手をしたらその労働力の一人になる」

「何をすればいいか、考えてみてよ」「いいアイデアだったら、私からプレゼントがあるわ」

「ただし、何点か条件つけさせてもらうわよ」

「なにか怖いなー、あの主任のこともあるし、絶対一筋縄ではいかないだろう」裕也。

「食事終わったら、大露天風呂で話そう、部屋についている露天風呂なら水着要らないけど、そうする？」子悪魔な私。

「俺、お・・・」言葉に困って、顔を赤くする。

「私はいいけど」フォローする瑞希、このカップル問題なさそうだ。

「お、おい・・・からかうなよ」よけい真っ赤になった、かわいいやつだ。

「せっかく水着買ったのだから、外へ行こう、天気もいいし、海外ではあまり温泉って行かないから」「裕也、あなたの水着もあるよ、さっき買ったんだけど、ほれ」と投げた。

「ひどいなー、俺の反応を楽しんでいるのだろう」ちょっと怒っている。

水着に着替えると、露天風呂と室内プールのあるフロアへ。

「ふいー、いいわね、富士山見ながらお風呂」私。

お風呂に入りながら、話の続き。

「つまり、外資系のあまり入っていない、農業株式会社を発展させることだよ」瑞希。

「ピポーン！賞品は瑞希の物」

「でも、一介の公務員の私にはなにも出来ないわ」瑞希。

「タクシードライバーも同じだ」裕也。

それから、色々、話した。

お風呂に入ったままだと、のぼせるので、プールサイドのチェアを寄せて話すことに。

「最後に、話すことは重要よ、言い終わるまで黙って聞いてね」

「まず、私は香港の証券会社を使って小さな農業株式会社の株を42%買った」

「42%の意味はわかるよね、全ての議事に拒否権を出せることになる」

「そして今、委任状を作らせている、瑞希と裕也に21%づつ委任する」

「それから、これ、2人とも端末出して」私は2人の端末に1年ペッグの香港往復エアーチケットを転送。

「あなた達は、香港で銀行口座と証券口座を作りに行きなさい、海外送金がほとんど出来なくなって、作る人は減ったけど、法律上は作れる」「当面のお金は私が金利1%で貸すわ」

「おいおい、利子取るのかよ」黙って聞いていたが、変なところで突っ込みを入れる裕也。

「行くときは連絡して、ホテルとか困るでしょ、私も行くから」

「つまり、2人で会社を経営しろってこと」瑞希。

「そう、委任状なので税金かからない」「あなたたちの仕事振りによって、私の買った株が上がるわけ、儲けさしてね」

「なんだ、えらく親切だと思ったら、行き着くところはそこか」裕也。

「でも、これはあなたたちにすごく良い条件なのよ」「リスクは私が取っているのだから」

「そんな、私は貰えない、こんなことって」瑞希。

「そこで、条件！これを飲んでもらわないと、委任状は渡せないわ」

「委任状は2人でないと会社の拒否権が使えない、この意味は、裕也、瑞希、絶対喧嘩しないこと」

「日本の将来を見据えて、2人で相談しながら会社を盛り立てること」

「最後の条件は、私をあなた達の結婚式に呼ぶこと、なんなら香港でやる？」

「おいおい、黙って聞いてれば、他人のことにここまで、干渉するな！」裕也怒った。

「そう？彼女の気持ちとあなたの気持ちは、合っていないという訳」

「私、裕也がいやなら、諦めるけど、条件飲んででもいい」消え入るような声で、瑞希。それを聞いた、裕也、茹だこになった、面白い！

「お、お、お・・・」言葉になっていないぞ裕也。

この3人をはたから見ていたら、面白だろうな、残念ながら周りには外国人観光客しかいない。

こういう場合は、女の方が大胆かつ巧妙だと思う、絶対尻にしかれるぞ、裕也。

「裕也、はっきりしなさい、なんなら私がパートナーになろうか？」

瑞希の顔がピックと反応、また意地悪してしまった。

「そんなー、俺はなににも否定していないぞー」声が情けない。

「話があまりにうますぎて、混乱してしまった」裕也。

「男なら、ここで決断しなさい」

「わかった、俺、瑞希好きだよ、こんな気持ちのなったのは初めてだ」

「その言葉、忘れるなよ、私を怒らせたらどうなるか判っている」やっぱり、小悪魔だな私。

「さて、2人とも納得したので、帰ろうか」私。

プールサイドから見る、夕日の当たった富士山がきれいだ、この日本の自然を残しておいてほしい。

車に乗り込む、今回は瑞希、助手席に座った。

この2人は、似合いのカップルだ、うまくやれよ裕也。

私は後ろで、一人は少し寂しい。

「さあ、メガ東京の秋葉原へ行くわよ」私。

秋葉原は一度寂れたが、再開発のよりにぎやかな町になっている、今でも電化製品買うならここがいい。

「お客の言う事だから文句言わないけど、なにしに行くんだ？」

「文句言っているわね、あなた達のパソコン買いに行くの」

「情報端末では、プライバシーあったものじゃないでしょ、暗号化ソフトも含め、全部そろえるわよ」

午後8時、食事はヨドバシデジカメのビルで「まぶし」と言ううなぎ料理で軽く済ますと、パソコン売り場へ。

「エリクソンソニーの V110 U」

「やっぱり小型の物がいいでしょう、私と同じのにするわね」「起動ドライブのメモリーは200G、メインメモリー8G」「必要なソフトはライセンスだけを、2台分」

「通信機能は世界標準でフルスペック、端末と繋ぐ光ケーブル、IP電話用のヘッドセット」

このコンピューターは、標準メタノールカートリッジで60時間稼動、カートリッジはコンビニで売っている。

メタノールカートリッジは世界で認定された安全基準で作られているので、機器にセットした状態なら機内持ち込みが出来る、機器に接続しないと燃料は絶対出ない機構になっていて、全てリサイクルされている。

「ホテルに戻るわよ、今晚も付き合っただね、2泊で予約しているから」私。

「ちょっと待て、俺たちも泊まるのか？」裕也。

「あたりまえでしょ、チェックアウトした？」

「何もせずに出てきたから、そのままだけど・・・」こら、だまって瑞希の手を握るな。

私は、またパソコンを立ち上げ、IP電話で、話をする。

「晚安」「張亞」「出嚟・・・」広東語で話す。

電話を終えて彼らに「ちょっと一人呼んだから、合ってくれる」

ホテルでは、キーをベルボーイに渡し、レセプションでことづけすると、すぐエレベーターホールに

エレベーターで端末認識、客室の階が表示されるので30階を押す。

部屋のリビングに座ると、3台のパソコンを光LANで繋ぎこみセッティング(セキュリティーのため、無線LANは使わない)必要なソフトの転送、まずは、買ったソフト、ソフト本体はダウンロード、ライセンス確認、他に必要なのはほとんどフリーソフトなので簡単にインストールできる、一台ずつ、手の静脈認証をさせる。

便利な世の中ではあるが、使いこなせないと意味が無い。

「こちらのブルーが裕也の、こっちのオレンジが瑞希のね、どちらも本人しか使えないよ」

「お互いの、暗号化ソフトの暗証番号はニー・ゴー・ゼロ・イチ、覚えておいてね」

パソコンの説明をしていたら、部屋に電話がかかってきた。

「晚安」「・・・」

「ラウンジ行くよ」私。

「本当に忙しいやつだな、普通の間人では付き合いきれないよ」裕也。

ラウンジには、クリスヴァンアッシュの派手なスーツを着た中国人？が待っていた。

“やあ、有華久しぶりだね、こんな所で呼び出されるとは思わなかったよ”広東語です。

“リーさん、お久しぶり、PHILLIPS証券の東京支店マネージャーになったって聞いたから”

“情報だけは早いな、いや手も早いけど”

“なによ、その言い方、行動が早いわって言いなさい”

「ごめん、裕也はわかるだろうけど、瑞希、広東語は無理よね」

「リーさん、日本語でいいわね」

「別に、内緒話するわけではないから、日本語で話そう、で紹介したい人ってこの2人かい」

「そう、まずは席に座って、あなたを紹介するわ」

4人は、大型のソファに腰掛けると、お酒を注文

「リーさんはスコッチ良かったわね、クラッシュアイスロック」

「私は、ボジョレー・ピラージュ、まだ在庫あるようだし、ボトルで」

「いつも豪快な飲み方だね、酒が強いのはお父さん譲りだね」

「裕也はこのワイン飲む？瑞希はブルーマルガリータで良い？」

私は返事を待たずに勝手に決めると、ウェイターを呼んで注文した。

お酒が運ばれてきたら早速、「みんなの未来に乾杯」って私。

「紹介するわね、彼は私の父の友人で、香港人のリーさん、今、日本の支店で GMをやっている」

「この2人の、相談と情報提供をお願いしたいの」「もちろん、無料ってわけじゃなく、本社へだけど、手数料落とすわ」

「いいよ、君の頼みは断ると後が怖いから、十分にケアさせてもらう」

「この2人は君の友人？」

「この2人は、私の投資先、お金増やさせてね」と私。

「さあ、飲もう！」「ボトルもう一本もってこい」

「もう酔ってないか？有華のやつ」「付き合わされる俺はつぶされないかな？」「今晚もあの部屋に泊まるのだから」未来が少しどころか、すごくバラ色に見えてきた。

これって、夢じゃないよな、隣の瑞希をちょっと突っついてみた。

「きゃー、なにをするの痛いじゃない」瑞希が文句を言う、夢じゃない。

「まず先に、業務命令、明日のフライトは10時だから、ホテル6時半出発！判ったわね」と裕也に言うておく。

「ちょっと、勘弁してくれ、今から何時まで飲むんだ」裕也。

「今、11時だから、1時には開放してあげるよ、あとは寝なくてもいいけど、明日の運転居眠りするなよ、裕也と心中はごめんだから」やさしい私だ。

次の日、チェックアウトしていると、裕也が後から2人でやってきた。

「遅い、私はチェックアウト終わったよ、お客を待たすつもりか？」

「ごめん、うち会社の上司まくのに、ちょっとね、この格好で、女性連れだったので、横を通っても気がつかなかったけど」

「まあ、それなら許してあげる」「見つからないうちに行こう」

瑞希が車に乗るのは、当たり前のように助手席。

日本滞在最後の日、この3日間は面白かったなー、友人も出来たし。

成田空港でチェックイン。

「有華、本当にありがとう、なにか夢のようだわ、あなたに事務所で会ったときからこんなことになるなんて、絶対予測できなかった」

「また、会いましょう、今度は香港ね」「2人の結婚式だと、もっと楽しめそうなんだけど」

瑞希は真っ赤な顔になった。

「そんなー、まだ判らないわよ」

「まあ、結婚しなくても、喧嘩しないでね、投資のリスクが増えるから」私。

「裕也！おまえ、瑞希を泣かしたら、怖いぞ！」

「おい、おまえってひどいな、そんな男に見えるか」

「まあ、あの主任よりはましね」

「一緒にするなー、俺は、お金より、瑞希だからな」

「のろけるなー、でもよく言った」

「瑞希、端末出して」私の観光端末を近づけると、支払いボタンを、100万新円を残し、全て瑞希の端末に。

「こんなに・・・」

「気にしない、どうせ持ち出せないお金だから、好きに使って」

「俺には？」裕也。

「甘い、瑞希にお小遣いとして貰いなさい」

「まあ、俺はそんな当てしないから」強がっているところが面白い。

「最後に一言、世の中お金じゃないよ、人脈が一番、よく覚えておいてね」

「また会おう、バイバイ！」

2人は私を見送りながら「まるで、台風のような女だったな」「あれでは嫁の貰い手ないよな」裕也。

「そんなことは無いわ、私たちにとっては救世主だったわ、優しい子よ」

私（有華）が振り返り、しかり見られた、俺が彼女にそっとキスをした所・・・

イミグレのゲートは外人でごった返していて、外人はけっこうキスしているので、目立たない。

だけど、今度来る有華メールが怖い！！

私は飛行機でシャンパンを飲みながら、思った。

彼らのような、未来を見つけようとする若者がいる限り、日本はなんとか復活するだろう。

私の故郷、日本は絶対立ち直るって思いたい。

寝不足なので、飛んだら眠ることにする、ノイズキャンセラーヘッドホンを掛けながら、眠る準備、日本の未来に乾杯。

あとがき。

いかがでしたか、飛行機の中で書き始めた短編なのですが、けっこう言葉遊びしているうちに、思ったより長くなってしまいました。

この話の中に出てくる、グッズは今でもありそう、もうちょっと経てば製品になるかなと考えた物などで、実在しない物は、メーカー名少しもじって。あります

ブランド品は、名前と物は間違っていないと思いますが、こんな所で売っているわけがないとか、突っ込まれそうです。

約3日間の出来事でしたので、時間的に設定がおかしい部分もありますが、ご容赦を。
日本破産をテーマに、もっとシリアス、暗くなるかと思えば、どうも楽観主義者なので、こんな話になってしまいました。

最初に書いたように、時間をかけて、調べ物しながら書いたわけではないので、変な表現、時間のつじつま、誤字、脱字、人に見せるようなレベルではありませんが、HPにUPしました。

こんなふうに行くわけがないとか、なんでも結構ですので感想、ご意見ありましたら、掲示板かに書き込むか、メールでもいただければ幸いです。

では、また有華がどこかへ出かけましたら、書きたいと思います。